國學院大學学術情報リポジトリ

連語ケラシについて：万葉集を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): ケラシ, ニケラシ, 万葉集, 二十一代集, 複合辞 キーワード (En): 作成者: 三宅, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001692

連語ケラシについて
—万葉集を中心として—

三宅　清

キーワード：ケラシ　ニケラシ　万葉集　二十一代集　複合辞

1　はじめに

○夕されば小倉の山に伏す鹿し今夜は鳴かず寝ねにけらしも（1664）

上掲の歌の下線部のようなケラシについて、中世、近世における様相に関しては先行研究がある。中世から近世にかけてのケラシを扱った、根来　司（1957）、中世におけるケラシを考察した山口明穂（1968）などである[1)]。しかしながら、上代におけるケラシについての先行研究は、きわめて少ない。鎌倉暄子（1999）があるが、ケラシを中心に扱ったものではない。そこで本稿では、主として、万葉集を中心に、上代のケラシについて明らかにしていく。なお、便宜、万葉集の調査を以て上代のケラシとする。ケラシ（後述のニケラシを含む）は29例みられる。

2　上代におけるケラシ

『時代別国語大辞典　上代編』（三省堂）では、ケラシは

・・・過去の事実、または過去から現在に継続している事実に対する、比較的確実性をもった推量をあらわすのに用いる。（傍点筆者）

という記述がある[2)]。筆者も、その指摘におおむね賛同するが、ケラシの例を、上掲の事実[3)]と推量（以下推定）との関係を基に、特に指示詞などの役割から、より丁寧にみていく。

岡崎友子（2010：127）では、いわゆる指示詞の「指示用法のまとめ」として、次のように述べている。

上代・中古では指示代名詞のコ系列も指示副詞のカク系列も、その用法は直示・照応用法であり、その指示対象は今、目に見える、直接知覚・感覚できる＜もの・こと＞（指示代名詞）・＜さま＞（指示副詞）であった。（下線部筆者）

上代のケラシには、コ系の直示用法と共起する場合が多い。

１天地のともに久しく言ひ継げとこの奇しみ魂敷かしけらしも（814）

この歌の中で事実に当たるのは、「この奇しみ魂敷かし」である。指示詞「この」が示すように、「奇しみ魂」は作者の目の前にある。上掲の「直示用法」である。また、この歌を詠んでいる時点が「今」であることも、「この」という指示詞から分かる。すなわち、この場合のケラシは、過去のある時点から現在（今）まで継続している事態を表す。それは「久しく言い継げ」という継続を表す句からもわかる。そしてそれはケラシのケリの意味（過去のある時点で起こったことが現在まで続いている）と考えられる。そして、詠歌の現在からは過去のことは不確実なことなので、推定のラシが用いられている。

２万代に語り継げとしこの岳に領巾振りけらし松浦佐用姫（873）

２も、事実は、作者が目の前にしている「この岳」だけで、他の「万代に語り継ぐ」「領巾振る」は、作者の推定である。詠歌の今を表す指示詞「この」が用いられ、ケラシのケリは、過去のある時点から今まで継続していることがわかる。その継続は、「万代の語り継げ」という句からもわかる。

３・・・み雪降る　冬に至れば　霜置けども　その葉も枯れず　常磐なす　いやさかばえに　然れこそ　神の御代より　宜しなへ　この橘を　時じくの　香久の菓子と　名付けけらしも（4111）

指示詞「この」からわかるように、作者は今、橘を目の前にしている。「神の御代より」「時じく」などから、過去からの継続性がうかがえる。

４・・・朝夕に　満ち来る潮の　八重波に　なびく玉藻の　節の間も　惜しき命を　露霜の　過ぎましにけれ　奥つ城を　ここと定めて　後の世の　聞き継ぐ人も　いや遠に　偲ひにせよと　黄楊小櫛　然挿しけらし　生ひてなびけり（4211）

指示詞「ここ」から墓（奥つ城）が今、作者の目の前に存することがわかる。ケラシに上接する、二重傍線部「然挿し」の指す「後の世の　聞き継ぐ人も　いや遠に　偲ひにせよ」から、継続性がうかがえる。

５皇祖の　遠き御代にも　おしてる　難波の国に　天の下　知らしめしきと　今のをに　絶えず言ひつつ　かけまくも　あやに恐し　神ながらわご大君の　うちなびく　春の初めは　八千種に　花咲きにほひ　山見れば　見のともしく　川見れば　見のさやけく　ものごとに　栄ゆる時と　見したまひ　明らめたまひ　敷きませる　難波の宮は　聞こしをす四方の国より　奉る　御調の船は　堀江より　水脈引きしつつ　朝なぎに　梶引き上り　夕潮に　棹さし下り　あぢ群の　騒き競ひて　浜に出でて　海原見れば　白波の　八重折るが上に　海人小舟　はららに浮きて　大御食に　仕へ奉ると　をちこちに　いざり釣りけり　そきだくもおぎろなきかも　こきばくも　ゆたけきかも　ここ見れば　うべし神代ゆ　始めけらしも（4360）

二重傍線部「ここ」から、作者が今、難波の国にいることがわかる。ケラシはその「今」から過去「知らしめしき」を振り返っている。その継続性は、「うべし神代ゆ」「今のをに　絶えず言ひつつ」などの句からもわかる。

６直越えのこの道にてしおしてるや難波の海と名付けけらしも（977）

「直越えのこの道にてし」から作者の目の前に、大和から難波に出る、最も近い道がある―それを過去に、難波の海と名付けられた―その道に作者が今（「この」）いる。ケリは過去から今への継続を表している。

７・・・あなおもしろ　布施の原　あな貴　大宮所　うべしこそ　我が大君は　君ながら　聞かしたまひて　さす竹の　大宮ここと　定めけらしも（1050）

「ここ」という指示詞から、作者が大宮にいることがわかる。大君が大宮を定めたのは過去の一時点のことで、それが作者が歌を詠んでいる現在まで続いている。ケリがその意味を表しており、ラシは作者の推定である。

次例はカク系の直示用法が用いられている。

８滝の上の　三船の山に　みづ枝さし　しじに生ひたる　とがの木の　い

や継ぎ継ぎに　万代に　かくし知らさむ　み吉野の　秋津の宮は　神からか　貴くあるらむ　国からか　見が欲しからむ　山川を　清みさやけみ　うべし神代ゆ　定めけらしも（907）

指示詞「かく」から、ここで描かれている情景が、作者が目の前にしている今であることがわかる。そして、「秋津の宮は　神からか　貴くあるらむ　国からか　見が欲しからむ」はラム、ムによって推し量られている。結局、「山川を　清みさやけみ　うべし神代ゆ　定む」が事実である。その中の「神代ゆ」の「ゆ」から、ケラシのケリの継続性がうかがえる。

９～12は、指示詞はみられないが、過去と、そこからの継続を表す句がみられる例である。

９八十桙の　神の御代より　百船の　泊つる泊りと　八島国　百船人の　定めてし　敏馬の浦は　朝風に　浦波騒き　夕波に　玉藻は来寄る　白砂　清き浜辺は　行き帰り　見れども飽かず　うべしこそ　見る人ごとに　語り継ぎ　偲ひけらしき　百代経て　偲はえ行かむ　清き白浜（1065）

「語り継ぎ」からもわかるように、ケラシに上接する「偲ふ」には過去（波線部「定めてし」の「し（き）」）からの継続が表されている。

10古の神の時より逢ひけらし今の心も常忘らえず（3290）

「古の神の時より」「今の心」から、過去から今（現在）までの継続性が見て取れる。

11処女らが後のしるしと黄楊小櫛生ひ代はり生ひてなびきけらしも（4212）

「処女らが後のしるしと黄楊小櫛」が事実。「黄楊小櫛生ひ代はり生ひてなびく」が推定の対象だが、「後の」「生ひ代はり」で継続を表している。

12山守の里へ通ひし山道そ繁くなりける忘れけらしも（1261）

「山守の里へ通ひし山道そ繁くなりける」が事実。「忘る」―それは山守が通うのを忘れてしまったからしい。「山守の里へ通ひし」の「し（き）」は過去。ケラシのケリは、その過去から現在まで継続していることを示す。ラシはそのことに対する推定。

13三香原布当の野辺を清みこそ大宮所定めけらしも（1051）

この歌は、上掲の1050番歌の反歌である。一本に、「大宮所ここと標刺し定めけらしも」とある。[4)]

以上のように、ケラシの多くは、過去から詠歌の今（現在）までの継続を表し、それはケリによるといえる。また、過去のことは現在からは不確実の要素が強いので、ラシが使われている。ケラシは、ケリ＋ラシの変化形とする説と、ケリの形容詞形とする説[5)]があるが、以上のことから、ケリの形容詞形ではなく、ケリ＋ラシの変化形と考えるのが妥当ではないか。

また、以下の３例は継続性がみられない。作者自身に関わることという共通性を持っている。

14世の中し苦しきものにありけらし恋にあへずて死ぬべき思へば（738）

＜世の中は苦しいものである。恋に堪えられずに死にそうなことを思うと＞

「恋にあへずて死ぬべき思へば」は作者自身のことであり、「事実」である。そこから連想される「世の中し苦しきものにあり」が「推定」である。この場合のケラシのケリはいわゆる気づきのケリと思われる。継続性はない。

15愛しと思へりけらしな忘れと結びし紐の解くらく思へば（2558）

＜（私を）いとしいと思っているのか。忘れないでと結んだ紐が解けるのを思うと＞

次例とともにケリに継続性はみられない。強いて言えば、気づきのケリか。

16うち鼻ひ鼻をそひつる剣大刀身に添ふ妹し思ひけらしも（2637）

＜鼻がむずむずしてくしゃみをした。身に寄り添う妹が（私を）思っているのか＞

3　上代におけるニケラシ

ニケラシ（いわゆる完了のヌ＋上述のケラシ）は、第２節で触れたケラシ単独とは違った様相を呈する。それは、事実と、それに対する推定という単純な構造から成り立っている場合が多いということである。ケラシ単独のように、継続性はみられない。例えば、17では、「桜田へ鶴鳴き渡る」が作者の聴覚、視覚による事実で、「年魚市潟潮干」が推定である。18は、「待てど

来まさず」が事実で、「豊国の鏡の山の岩戸立て隠る」が推定である。

以下、＜　＞内に事実―推定を示す。

17桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る（271）

＜桜田へ鶴鳴き渡る―年魚市潟潮干＞

18豊国の鏡の山の岩戸立て隠りにけらし待てど来まさず（418）

＜待てど来まさず―隠る＞

19年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆ（1163）

＜朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆ―年魚市潟潮干＞

20夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも（1511）

＜夕されば小倉の山に鳴く―鳴かず寝ぬ＞

21今朝の朝明雁が音聞きつ春日山もみちにけらし我が心痛し（1513）

＜今朝の朝明雁が音聞く―もみつ＞

22こもりくの泊瀬の山は色づきぬしぐれの雨は降りにけらしも（1593）

＜泊瀬の山は色づきぬ―しぐれの雨は降る＞

23夕されば小倉の山に伏す鹿し今夜は鳴かず寝ねにけらしも（1664）

＜今夜は鳴かず―寝ぬ＞

24湯羅の崎潮干にけらし白神の磯の浦廻をあへて漕ぐなり（1671）

＜あへて漕ぐ―湯羅の崎潮干＞

25白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺のうぐひす鳴くも（1888）

＜うぐいす鳴く―冬は過ぐ＞

26娘子らに行きあひの早稲を刈る時になりにけらしも萩の花咲く（2117）

＜萩の花咲く―早稲を刈る時になる＞

27このころの秋風寒し萩の花散らす白露置きにけらしも（2175）

＜秋風寒し―白露置く＞

28妹が髪上げ竹葉野の放れ駒荒びにけらし逢はなく思へば（2652）

＜逢はなく思ふ―放れ駒荒ぶ＞

29世の中の常の理かくさまになり来にけらしすゑし種から（3761）

＜すゑし種から―かくさまになり来＞

ニケラシのニ（助動詞ヌ）で、一旦事態が完成している[6]。それで、第２節で触れたケラシ単独のようにはケリの過去から現在への継続性はみられない。

次の３例のニケラシは、上掲のニケラシとは異なる。

30我が背子が着せる衣の針目落ちずこもりにけらし我が心さへ（514）

31彦星のかざしの玉し妻恋に乱りにけらしこの川の瀬に（1686）

32初尾花花に見むとし天の川隔りにけらし年の緒長く（4308）

３例ともいわゆる倒置法が用いられていると思われる。すなわち、30は「我が心さへ我が背子が着せる衣の針目落ちずこもりにけらし」、31は「この川の瀬に彦星のかざしの玉し妻恋に乱りにけらし」、32は「年の緒長く初尾花花に見むとし天の川隔りにけらし」ではないか。そうすると、各々のニケラシはラシに上接する全体に対する推定といえる。

4　中古以降のケラシ

本節では、前節までの上代のケラシの様相を受けて、中古以降のケラシをみていく。資料は勅撰二十一代集を用いる。二十一代集におけるケラシは以下の全36例と、少ない[7]。

○古今和歌集

33あらかねの地にしては、素戔烏尊よりぞ、起りける。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、素直にして、事の心分き難かりけらし。（仮名序５頁・６行[8]）

34桜花咲きにけらしもあしひきの山の峡より見ゆる白雲（59）

35恋せじと御手洗河にせしみそぎ神は受けずぞなりにけらしも（501）

36落ちたぎつ滝の水神年積り老いにけらしな黒き筋なし（928）

○後撰和歌集

37我がごとく物思ひけらし白露の夜をいたづらに起き明かしつつ（424）

○後拾遺和歌集

38君ませと遣りつる使来にけらし野辺の雉はとりやしつらむ（17）

39さむしろはむべ冴えけらし隠れ沼の蘆間の氷ひとへしにけり（418）

40鷗こそ夜がれにけらし猪名野なる昆陽の池水うは氷せり（420）

41沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづ枝をあらふ白波（1063）

○金葉和歌集

42水鳥のつららの枕ひまもなしむべ冴えけらし十ふの菅菰（275）

○千載和歌集

43秋深くなりにけらしなきりぎりす床のあたりに声聞ゆなり（332）

○新古今和歌集

44ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく（２）

45この寝ぬる夜の間に秋は来にけらし朝けの風の昨日にもにぬ（287）

46冬深くなりにけらしな難波江の青葉まじらぬ蘆の村立（626）

47白露は置きにけらしな宮城野のもとあらの小萩末たわむまで（1566）

○新勅撰和歌集

48秋の嵐吹きにけらしなと山なる芝の下草色変はるまで（333）

49時雨れつつ色まさりゆく草よりも人の心ぞ枯れにけらしな（868）

50秋深くなりにけらしな鈴鹿山紅葉は雨と降りまがひつつ（1289）

○続後撰和歌集

51伊勢の海に海人のとるてふ忘れがひ忘れにけらし君も来まさず（984）

○玉葉和歌集

52今日に明けて昨日ににぬは皆人の心に春の立ちにけらしも（１）

53いつしかも霞みにけらしみよしのやまだ経る年の雪もけなくに（７）

54秋風はふけにけらしな里遠き砧の音のすみまさり行く（755）

55初時雨降りにけらしな明日よりはあきさか山の紅葉かざさむ（1100）

○続千載和歌集

56夜の程に積りにけらし昨日まで見ざりし山の嶺の白雪（651）

57白雪の降りしく冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺に鶯鳴くも（713）

○続後拾遺和歌集

58わぎもこがかたしきながら寝にけらし今朝ざくろ髪の乱れがちなる（508）

○風雅和歌集

59咲きそめて春を遅しと待ちけらし雪のうちより匂ふ梅が枝（68）

○新千載和歌集

60いと早も春来にけらし天の原振りさけ見れば霞たなびく（５）

61来にけらし見てしも見まく思ふ山聖の跡もさこそすみけれ（2140）

○新拾遺和歌集

62秋よりも冴えにけらしな降る雪の積もりて晴るる山の端の月（636）

63秋寒くなりにけらしも山里の庭白妙に照らす月影（1631）

○新後拾遺和歌集

64あすか風吹きにけらしなたをやめの柳のかづら今靡くなり（56）

65初霜は降りにけらしなしなが鳥ゐなのささ原色かはるまで（483）

○新続古今和歌集

66いつしかと咲きにけらしな鶯や枝にこもれる花誘ふらむ（45）

67朝氷とけにけらしな年の内に汲みてしらるる春の若水（1606）

68一時雨過ぎにけらしなみよし野の吉野の滝つ岩たたくなり（1764）

36例しかみられないので、ここから歴史的な変化をみるのは難しい。そこで36例全体と、上代のケラシを比較する。そこからいえることは、第一に、ほとんどがケラシ単独ではなく、ニケラシということである[8)]。また、前節でも述べたが、上代のニケラシは、ほとんどが＜事実―推定＞という構造になっている。上掲の中古以降のニケラシにおいても、＜事実―推定＞という構造の歌が多い。＜事実―推定＞ではない用例は、強いて挙げれば、55「初時雨降りにけらしな明日よりはあきさか山の紅葉かざさん」（玉葉和歌集）66「いつしかと咲きにけらしな鶯や枝にこもれる花誘ふらむ」（新続古今和歌集）など、僅かである。

上代のニケラシは、ラシ全体の中で考える必要があると思われる。すなわち、上代のラシは、多くが＜事実―推定＞の構造を有するということである。次にその例を挙げる。

69海人娘子玉求むらし沖つ波恐き海に船出せり見ゆ（1003）

＜沖つ波恐き海に船出せり見ゆ―海人娘子玉求む＞

70うちなびく春来たるらし山のまの遠き木末の咲き行く見れば（1422）

＜山のまの遠き木末の咲き行く見る―うちなびく春来たる＞

71古の人の植ゑけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし（1814）

＜古の人の植ゑけむ杉が枝に霞たなびく―春は来ぬ＞

72明日香川もみち葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし（2210）

＜明日香川もみち葉流る―葛城の山の木の葉は今し散る＞

73ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ（3955）

＜二上山に月傾きぬ―夜はふけぬ＞

69～73からいえることは、事実とラシに上接する事態とは、その歌の作者の知識の中で連想が行われているということである。つまり、単純化すれば、69ならば「見ゆ（事実）―玉求む」、70ならば「咲き行く（事実）―春来たる」、71ならば「杉が枝に霞たなびく（事実）―春は来ぬ」、72ならば「もみち葉流る（事実）―木の葉散る」、73ならば「月傾きぬ（事実）―夜はふけぬ」という連想が成立しているということである。69～73は事実が視覚に基づくが、次に事実が聴覚に基づく場合をみていく。

74ますらをの鞆の音すなりもののふの大臣楯立つらしも（76）

＜ますらをの鞆の音すなり―もののふの大臣楯立つ＞

75宇治川を船渡せをと呼ばへども聞こえずあらし梶の音もせず（1138）

＜梶の音もせずー宇治川の船渡せをと呼ばへども聞こえずあり＞

76妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥が音さわく秋過ぎぬらし（2166）

＜妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥が音さわく―秋過ぎぬ＞

77沖辺より潮満ち来らし可良の浦にあさりする鶴鳴きて騒きぬ（3642）

＜可良の浦にあさりする鶴鳴きて騒きぬ―沖辺より潮満ち来＞

78ぬばたまの夜は明けぬらし玉の浦にあさりする鶴鳴き渡るなり（3598）

＜玉の浦にあさりする鶴鳴き渡る―夜は明けぬ＞

79今よりは秋づきぬらしあしひきの山松陰にひぐらし鳴きぬ（3655）

＜山松陰にひぐらし鳴きぬ―今よりは秋づきぬ＞

74は「鞆の音す―楯立つ」、75は「梶の音せず―呼ばへども聞こえず」、76は「鳥が音さわく―秋過ぎぬ」、77は「あさりする鶴鳴きて騒く―潮満ち来」、78は「鶴鳴き渡る―夜は明けぬ」、79「ひぐらし鳴きぬ―秋づきぬ」という連想がみられる。ラシのほとんどは69～79のタイプである。

上代では、ラシの代表的な構造<事実―推定>に支えられてニケラシの<事実―推定>という構造が多くみられると考えられる。ラシは中古以降急速に衰退する。中古以降のニケラシは、ラシに支えられることがないので、用法は継承しているが、用例数は減少しているのではないか。

また、上代では終助詞モがみられる[9)]が、中古以降のニケラシには、終助詞ナが多くみられるという違いがある。

5　ケラシの複合辞性

最後に標題において、なぜケラシを複合辞とせず、連語としたかについて、簡単に述べる。複合辞の研究は多くの蓄積がある[10)]。しかしながら、その対象は、現代語、就中助詞を扱ったものが中心である。その中で、強いて本稿のケラシに当てはまると思われる複合辞についての論としては、夙に永野　賢（1953）がある[11)]が、それに検討を加えた松木正恵（1992）に総括的な規定がある。その最も大きな基準は次の三点である。

（a）辞的機能を果たしている。

（b）「詞」（実質的意味）から「辞」（形式的・関係構成的機能）へと変化している。

（c）構成要素の合計以上の独自な意味が生じている。

永野　賢（1953）も松木正恵（1992）も、対象は現代語の複合助詞なので、慎重に扱わなければならないが、（a）（b）はケラシは「辞」なので、そもそも当てはまらない。本稿では（c）の規定に注目したい。

第２節で述べたように、上代のケラシは、ケリ、ラシの独自の意味が生きており、上掲（c）の「構成要素（ケラシの場合はケリとラシ）の合計以上の独自な意味が生じている。」には当てはまらない。そのことから、ケラシは複合辞とはいえないのではと考え、連語とした。

6　おわりに

第５節までに述べてきたことを纏めると、次のようになる。

１上代におけるケラシは過去から現在に継続してきたことに対する推定を

表す。

2上代におけるニケラシは1のケラシ単独の場合と異なり、ニで事態が完成しており、継続性はみられない。

3中古以降のケラシは全体的に用例数が少ないが、そのほとんどがニケラシであり、上代とは異なる様相を呈する。

4中古以降のニケラシは、上代のニケラシと同じく、＜事実―推定＞の構造を有する例が多い。

5上代のケラシは、その構成要素のケリとラシの意味が生きており、複合辞とはいえない。

以上のような結論を得た。特に5の複合辞との関連については、例えば三宅　清（2022）で扱ったベカメリ、ベカナリは構成要素のベシ、メリ、終止ナリの合計以上の独自な意味がみられるので複合辞としたが、古典語の複合辞の研究の進展を俟たなければならない。

使用テキスト

○万葉集、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、金葉和歌集、詞花和歌集、千載和歌集、新古今和歌集・・・新日本古典文学大系（岩波書店）

○新勅撰和歌集、続後撰和歌集、続古今和歌集、続拾遺和歌集、続後撰和歌集、玉葉和歌集、続千載和歌集、続後拾遺和歌集、風雅和歌集、新千載和歌集、新拾遺和歌集、新後拾遺和歌集、新続古今和歌集・・・新編国歌大観（角川書店）

用例後の歌番号は、各々のテキストに拠る。表記は適宜改めた。

注

1）他に松尾芭蕉におけるケラシについて、小宮豊隆（1933）の論考がある。

2）ちなみに、『日本国語大辞典　第二版』（小学館）では、上代のケラシは、

①ある兆候の存在からその根拠となる事態の存在に気づき、その存在の可能性を推量する。・・・だったのだろう。

②こういう条件があれば、そうなるのが道理であるという筋道を見いだして、その筋道の存在の可能性を推量する。そういう訳で・・・たのだろう。

と記述されている。

3）事実とラシとの関係については、夙に、松尾捨治郎（1961：97）、此島正年（1973：

324）などでも指摘されており、『日本国語大辞典　第二版』（小学館）でも、ラシについて、

確定的な事実に対する推量を表わすが、思いをめぐらして想像するといったものではなく、事実に対する志向作用を表わす。（傍点筆者）

との記述がある。

4）沢瀉久孝『万葉集注釈』、武田祐吉『万葉集注釈』でも触れられている。

5）ケラシがケリの形容詞形という説には、築島　裕（1957）馬淵和夫（1972：186）鎌倉暄子（1999）などがある。また、夙に本居宣長は、『詞の玉緒』において、ケラシのラシは「らし」とは別の辞であるという言説がある。

6）高山善行（2021：129）に、

「ニケリ」「ナリケリ」は段、場面の末尾文に生起し、完結機能をもつ。「ニケリ」は場面、「ナリケリ」は段の完結に偏る。

との指摘がある。本稿は、物語の段、場面とは異なるが、ニケリの完結機能はニケラシにも当て嵌まるのではないか。

7）拾遺和歌集、詞花和歌集、続古今和歌集、続拾遺和歌集、新後撰和歌集には、ケラシはみられない。

8）用例33の古今和歌集の仮名序はニケラシではなくケラシだが、過去からの継続ではなく、単なる過去の事態に対する推定を表わしている。

9）森野　崇（1997）でも、ケラシがモに上接する場合が多いという指摘がある。

10）例えば、藤田保幸・山崎　誠（2006）藤田保幸（2019）などが挙げられ、日本語教育の分野では田中　寛（2010）などがある。

11）永野　賢（1953）では、基準として、次の三ヶ条を挙げている。

１異なる構成要素のプラス以上の意味を持っていること。

２類語（意味の近似した他の助詞や複合助詞）の中にあって、独特の意味やニュアンスを分担していること。

３構成要素の結合が固着していること。

参考文献

岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房

鎌倉暄子（1999）「いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について―あらし・けらし・ならしとの関連において―」『福岡女子大学文学部紀要　文芸と思想』第63号

此島正年（1973）『国語助動詞の研究　体系と歴史』桜楓社

小宮豊隆（1933）『芭蕉の研究』岩波書店

高山善行（2021）「歌物語テクストと時間表現　枠構造論の再検討」『［研究プロジェクト］

時間と言語　文法研究の新たな可能性を求めて』ひつじ書房
田中　寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
築島　裕（1957）「終止形に続く助動詞」『国文学解釈と鑑賞』第22巻第11号
永野　賢（1953）「表現文法の問題―複合辞の認定について―」『金田一博士古希記念言語民俗論叢』三省堂
根来　司（1957）「疑ひと治定―「けらし」を中心として―」『国語と国文学』第34巻第９号
藤田保幸・山崎　誠（2006）『複合辞研究の現在』和泉書院
藤田保幸（2019）『複合助詞の研究』和泉書院
松尾捨治郎（1961）『助動詞の研究』白帝社
松木正恵（1992）「複合辞性をどうとらえるか―現代日本語における複合接続助詞を中心に―」『辻村敏樹教授古稀記念　日本語史の諸問題』明治書院
馬淵和夫（1972）『上代のことば』至文堂
三宅　清（2022）「複合辞ベカメリについて―証拠性の変質―」『國學院雑誌』第123巻第１号
森野　崇（1997）「古代日本語の終助詞「も」の機能」『二松学舎大学論集』第40号
山口明穂（1968）「助動詞「らし」とその周辺の語―中世文語での用法―」『国語と国文学』第45巻第９号